

概要報告

実施期日	8月4日(金)
部会名	小学校 社会部会

神奈川県研究主題

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

テーマ

『自信をもって自己の考えを表現できる子どもたちをめざして』

提案概要

第6学年「世界の中の日本～R 国大虐殺から学ぶことは～」の学習を通して、研究主題「主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善」及びテーマ「自信をもって自己の考えを表現できる子どもたちをめざして」に迫った実践である。

本単元は、公民分野の最後で国際貢献の意義を学習する。社会情勢を鑑みて、教科書の内容を取り扱うことが難しかったため、教科書の代替教材としてT市出身であるR・Mさんが義足を作る活動を通して、その活動中の工夫や努力、葛藤に触れながら、「正解のない問題」をクラス全体で考えていく授業構成となっている。紹介する本時は、全8時間計画の中の7時間目「R・Mさんの思いを探ろう⑤～Mさんのジレンマをどう考える？～」である。民族間の争いで起こった大虐殺で手足を失い、義足を必要としている人が大勢いる中で、R・Mさんは「働き盛りの人」「国づくりのために力になる人」に義足を提供することに決めたが、虐殺した側のF族も義足を求めるようになり、人々の思いに触れながらどの決断がよりよいのか葛藤する。そこで、今回は「虐殺した側の人にも義足を提供すべきか？」という課題を学びの中核とした。また、それらを考えることを通して、「平和を築くとはどういうことか？」も考えていった。本時は、これまでの資料(Mさんとのメールのやり取り、書籍)も振り返りながら、資料から適切に読み取ったり、自分の考えを表現したりすることを目標としている。資料の扱い(残虐なシーンが多いため、教員が資料の選別を行う)をはじめ、導入(絵本や書籍を取り上げる)や問いの設定、子どもたちの思考の変容、疑問に思ったことをR・Mさんとメールでのやり取りをするなど、様々な工夫を行った実践である。

質疑応答

- Q 今回の実践をより発展させるために、どうしたらよいか？先進国が紛争に関わってきた背景をさらに多く取り入れてはどうか？
- A 単元の最初に1時間使って、「どのように大虐殺は行われたのか？」を学習した。その後、学習を進めていく中で、「虐殺した側にも義足をもらう権利はあるけど、人権はある。」という視点で考えが揺れ動く児童が多くいた。こうした授業の中での児童の発言から、児童の関心に授業を寄せていく形になった。また、発達段階を考慮して、様々な資料を取り扱いながらどのくらい知識を与えるのかを吟味して、授業を展開した。

協議の柱及び協議概要

「どのように独自教材を扱っているのか？」や「社会科において道徳的内容をどう扱っていくのか？」についてグループ協議を行った。主に以下の意見が出された。

①【どのように、教科書以外の独自単元を扱うか？】

(教材・資料作り・各学校への取組についての意見交換)

- ・社会科だけではなく、総合的な学習の時間とも関連付けて授業づくりをしている。
- ・第4学年の伝統工芸を学ぶ学習では、鎌倉彫を販売しているお店に行ったり、その分野で新しい取組をしている方にインタビューしたりする授業を行った。

- ・第3学年の地域学習では、地域の様々な人を招いて歴史の話を聴く。
- ・第6学年の歴史分野で、縄文時代の竪穴式住居を組み立てて1泊する。
- ・単元を通して、児童に社会的な見方や考え方が身に付くように、他教科との繋がりを意識して指導している。
- ・小学校では、地域巡りや工場見学で独自教材を取り扱うことが多い。中学校の実践で、「縄文時代と弥生時代のどちらが豊かな暮らしをしているのか？」をディベート方式で行った。
- ・地域ごとのゴミの回収の仕方を学ぶ。

②【どのように、道徳的な内容を含んだ教材を扱うか？】

- ・社会科の授業の中で討論をする時に、資料など根拠となるものを取り入れて自分の考えを発言する。
- ・「社会と道徳の共通点と相違点って何だろう？」と考えた時に、見方や考え方が違う。一方、多面的、多角的に考えるという点においては、社会と道徳で重なる点が多い。授業の中で対立する意見について討論して終わると、道徳扱いになる。資料や事実に基づいて、自分の考えをもつことが社会科の扱いになる。
- ・社会や道徳で人種差別、紛争、貧困を取り扱う際のアプローチの仕方が違う。
- ・社会では、人の思いや営みが関わる。感情的な考えにならないように、資料を十分に活用していくことが重要である。

まとめ概要

実践の素晴らしい点は、3点ある。1点目は、聴き合う姿である。なぜ、子どもたちは聴き合うのか、なぜ語れるのかは、問題が自分事となっているからであり、これまでに「正解のない問題をクラスみんなまで考えていくこと」を積み重ねてきたからである。この積み重ねが自分を表現していくことに繋がっている。学習をきっかけにして、「自分も何かしたい」という思いを形（書き損じはがきを集める・手紙を書いて送る）にしたことにも表れている。

2点目は、社会科で何を教えるのか、その思いが明確である。今単元は、地球規模で発生している課題解決に向けた連携・協力を学ぶ単元であった。国際的な現状を目の当たりにして、児童は不安に駆られたが、R 国民のデータに触れた時、様々な不安がありながらも逞しく生きている人々がいることを知ることができた。その人々の思いから、「自分たちは、どうなのだろう？」と自分のことに思いを馳せていくことが社会を知ることである。課題を考えるときに、情意面だけでなく、客観的な資料を用いることで、そこから脱却して思考することができる。その国・人のジレンマを考えることを通して、社会の在り方を考える。今単元では、正解のない問題に挑戦した。これこそ、社会科が大事にする見方や考え方に繋がっていったのだと思う。

3点目は、道徳的な内容を含んだことの良さがあった。道徳には答えがなく、それぞれの考え方を尊重していくことで、自身の価値観が育っていくものである。今回の内容は、ジレンマや葛藤など正解のない課題だったのかもしれないが、社会科はその考え方や生き方によって進んだ歩みや事実がある。今回で言えば、登場人物のジレンマを考えることを通して、社会をつくることの難しさを体験しながらも、登場人物がたどった人生も感じられる内容構成であり、事実に基づいたことから、客観的な根拠もある。人にスポットを当てたことで、その人物に寄り添い、自分事として捉えることで、課題が切実なものになったのだと思う。大事になってくるのは、双方のジレンマの社会的背景にどれだけ迫れるかである。

最後に課題についてである。今回は、教科書から離れて独自に教材を探してきた。資料を探し出す膨大な時間と労力は、誰もがができることではない。その辺りは、個人では限界があるため、学校・学年・関係機関など、様々な人と繋がっていくことが大事になってくる。教材探しでは、外部機関との繋がりの中で得られるものがある。教師の単元の中で育ってほしい、目指したゴールの姿をどこに設定するかがカギとなってくる。